

## 油彩

(テンペラ併用)

彫像のある静物を描く②

## 三浦明範の静物画講座

みづらあきのり 1953秋田 東京女子大学卒 文化庁主催現代美術展、セントラル美術館  
 油絵大賞展、昭和会展、安井賞展、具象絵画ビエンナーレ、日本の絵画新世代展、両洋の眼・現  
 代の絵画展、21世紀の旗手展などに出品 文化庁芸術家在外研修員としてベルギーに滞在(96  
 ~97) 春陽堂画員

## ■油絵具のメデイウムに

ついて(一)

私たちは何気なくメデイウムという言葉を使っていますが、このメデイウムとはいったい何でしょう。

英語ではMediumと書きますが、ステーキの焼き方のミディアムや、洋服のサイズのMと同じ言葉です。また、放送や出版などのマスメディアのメディアも同じです。すなわち、もの・ものの間にある事物を指しているのです。

絵画用語では「媒剤」と訳していますが、顔料と顔料もしくはキヤンヴァスの間にあるものがメデイウムということになります。つまり、絵具の接着成分がメデイウムなのです(※注)。

通常私たちは、チューブで絵具を手に入れますから、すでにメデイウムが入っていることになりません。したがって、一般的に「メデイウムを混ぜる」と言う時には、

いわゆる「溶き油」のことを指すことになります。

ところで、このメデイウムを手に入れるため、私たちが画材店に行くと、画液液のコーナーにはたくさんピンが並び、どれを買っていいのやら迷ってしまいます。

結局、これまでなんとなく使っていたものや、誰かに良いと言われたものを鵜呑みにして、選んでしまいますね。

たとえば、たいいていの方は、ペインティング・オイルなどの調合油が、ポピーとペトロールとか、リンシードとテレピンの混合油を

使われているのではないのでしょうか。これ自体は決して誤りではありません。つまり、必要なものはすでにチューブの中に入っているわけで、単に、絵具を柔らかくしたいということだけなら、むしろ市販のペインティング・オイルのようなのの方が、最適なのです。

しかし、油絵具の表現はそれだけではありません。美術館で見る

までもなく、油彩画が発明されて

600年、いろいろな表現が試み

られてきました。そのいずれもが

同じ「油絵具」というものの表現

なのです。とかく、私たちは印象

派以降の技術を「油絵的」と見て

しまいがちですが、ただか10

0年余り前からの技術がすべてで

はないのです。

私たちがメデイウムを混ぜると

いうことは、チューブの成分では

足りないものを補う、ということ

なのです。

## ■画用液の種類

市販されている画用液を大きく分類すると、下の表のようになります。基本的には、メデイウムを調合するには、次の三つを組み合わせてやることになります。

① 乾性油・酸素と化合して固ま

る(酸化重合反応) 油脂です。

一度固まったものは油に溶けま

せんので、重ね塗りの時に、下

の絵具と混じることがないの

乾性油	生油	リンシード・オイル(亜麻仁油) ポピー・オイル(芥子油) ウォルナツ・オイル(胡桃油)		
	加工油	サンシクンド・オイル スタンド・オイル ポイルド・オイル		
樹脂	硬質樹脂	コーパル	ワニス	油性ワニス 硬質樹脂などを乾性油に溶かしたもの。 描画用として使用。(ピクチャー・コーパル・ワニスなど) ※油性ワニスは除去しにくいので、今日では仕上げ用には使用しないことを薦めている。
	軟質樹脂	ダグマル マスチック		揮発性ワニス 軟質・合成樹脂を、テレピンなどの揮発性油に溶解したもの。 描画用(バンドル)、加筆用(ルツェー)、仕上げ用(タブロー)。
	合成樹脂	アルキド樹脂 シクロヘキサノン樹脂		
	バルサム	ベネチア・テレピン・バルサム		
揮発性油	植物性油	テレピン アスピック(スパイク・ラベンダー)		
	鉱物性油	ペトロール		
調合油	ペインティング・オイル			
その他	シッカチーフ(乾燥促進剤) ミクスジョン、ゴールドサイズ(箔下ワニス) 蜜蝋(絵具に含まれるほか、マット仕上げ用に用いられる) フキサチーフ(定着液) ブラッシュ・クリーナー(筆洗油) ストリッパー(剝離剤)など			

す。油絵具のもつとも重要な成分になります。生のもと、日に晒したり、加熱処理したものがありません。

② 樹脂：化学的な変化を伴わずに、溶材が揮発して固まるものです。こちらは、一度固まったものでも、再び溶剤で溶けます。固形樹脂（いわゆる樹脂）とパルサムがあります。前者は、その硬さや透明性、輝きの性質から、ワニスとしての主成分となります。また、乾き（固化）が速いため、一時的な固化成分として機能します。通常、液状で市販されている樹脂はワニスと



（制作過程9）  
前回までの制作。一度固有色を塗った後に、テンペラ白での浮き出し。

呼ばれますが、そのままメデイウムとしても使えます。パルサムは半流動性で、乾きは著しく遅いのですが、その輝きと透明性ゆえ、古典絵画では重要な材料でした。

③ 揮発性油・樹脂の溶剤やメデイウム類の希釈剤として使われ、そのほとんどの成分が揮発して無くなるものです。メデイウムには、筆さばきの良さのために加えます。

乾性油だけでは、乾きの遅さを感じてしまうでしょうし、樹脂だけでは、重ね塗りの時に下の層が溶け出してしまいうでしょう。いわ



（制作過程10）  
さらにテンペラ白の浮き出し。特に暗い部分の微妙な調子は、この段階でしっかりと描いておく。壁には、もう一度油彩で固有色。塗ってしばらくしてから布でふき取り、微細な凹凸感を強調。

んや、揮発性油のみでは、ばさばさした絵になって、絵具が剥落しかねません。この「三種の神器」があつて初めてメデイウムとしての機能が発揮されるのです。ペインティング・オイルなども、同じように三つの組み合わせで調整されています。

では、このようにたくさんある画溶液から、自分の表現に合ったものは、どうやって選ぶのでしょうか。これについては、次回以降に書きたいと思います。

### ■制作の続き

前は、一度固有色を塗った後



（制作過程11）  
布とレリーフも同様に起こし、壁以外はすべてテンペラ白が乗った状態。

に、テンペラ白で浮き出しを行っている途中でした（制作過程9）。引き続き、テンペラ白で描いていきます。特に、暗い部分の微妙な調子は、この後、ほとんど表現することはありませんので、この段階でしっかりと描いておきます。

壁には、先にシルバーホワイト

で油脂分を手入していますので、

テンペラの吸収性が絶縁されています。もう一度油彩で固有色を塗って、しばらくしてから布でふき取り、微細な凹凸感を強調します

（制作過程10、11）。

壁の部分は、もう一度混合白で

浮き出しをします。他の部分には、

二度目の油彩固有色をつけ、さらに

テンペラ白で浮き出しを行います

（制作過程12～15）。

部分に分けて作業しているのは、

油彩部分の「乾き」を考慮している

からです。テンペラは、油彩が

生乾きのうちに乗せたほうが良く

乗ります。したがって、一日で出

来る面積を考えて、その分だけ油

彩を塗っているのです。色彩はほと

んど最初の絵具と同じ色を使いま

すが、浮き出しをしなかった部分

は、同色を二度重ねたことにな

では、同じ明度でもいわゆる「深み」が違ってきます。さらに、モチーフすべてに油彩固有色を薄くかけ、ハイライトと最暗部を描き込んで完成です（制作過程16、17）。

（※注）さらに正確に表現すると、このメデイウムを構成するのは、展色材（Vehicle）：無くならずに残る成分、溶剤（Solvent）：固体を溶かす成分、希釈剤（Diluent）：液体を薄める成分）に分かれる。たとえば、この講座で使用しているテンペラ・メデイウムは、展色材が卵とダンマルで、ダンマルの溶剤はテレピン、メデイウムの希釈剤は水ということになる。

### （今回のデータ）

- 支持体：シナベニヤ・パネル
- プレパレーション：膠石膏地
- テンペラ・メデイウム：全卵、ダンマル樹脂
- 油・メデイウム：スタンド・リンシード・オイル、ダンマル樹脂、テレピン
- 使用した油絵具：シルバー・ホワイト、ピーチ・ブラック、カドミウム・レモン、同・イエロー、同・レッド、同・プルプル、ビリジアン、セルリアン・ブルー、コバルト・ブルー、ウルトラマリン・ブルー、イエロー・オーカー、ライトレッド、バント・シエンナ、ロー・シエンナ、バント・アンバー

(制作過程15)  
果実のテンペラ浮き出しと、布と壁には油彩固有色。



(制作過程12)  
壁の部分に混合白で浮き出し。レリーフと頭像に、二度目の油彩固有色。最初の絵具とほとんど同じ色を使用。



(制作過程16)  
モチーフすべてに油彩固有色を薄くかける。下のガラス板にも着色。壁は凹凸感を強調するために、両刃のかみそりを立てて、混合白を削き落とす。



(制作過程13)  
瓶に固有色、12で乗せた油彩の上には、四度目のテンペラ白の浮き出し。



(制作過程17)  
ハイライトをテンペラ白で起こし、モチーフの最暗部にはさらに油彩で強調。必要に応じて黒や補色を加えたものにする。壁にはもう一度薄く油彩固有色を塗布し、ひび割れなどを描き込む。最後に油彩を必要に応じて繰り返し塗り、ハイライトにもごく薄くかけて完成。



(制作過程14)  
同様に、瓶のテンペラ浮き出しと、果実の油彩固有色。



(完成図)  
頭像の静物

F 10号

パネルに石膏地、テンペラ・油彩